

鹿児島県

vol.14
2010.秋
FREE MAGAZINE

奄美パークだより



特集1 田中一村美術館特別展「田中一村 新たな全貌」



特集2 映画「地球交響曲第七番」監督 龍村仁インタビュー

特産品誕生STORY 沖永良部島「えらぶゆり」 / 群島TOPICS / PAさんのヨコガオ ほか



背景肖像写真 ©2010 Hiroshi Niiyama

最大の謎 田中一村の奄美移住

ー特別展「田中一村 新たな全貌」によせてー

田中一村。本名、田中孝。作品が中央の展覧会等でほとんど認められることなく、ここ奄美の地で69年の生涯を閉じた日本画家である。

この展覧会は、多数の未公開作品を含む200点以上の作品を一堂に公開する過去最大規模の「田中一村展」であり、その名を冠する当美術館が全ての美術ファンに贈る初の巡回特別展である。

明治41年、栃木県に生まれた田中は、昭和33年(50歳)に奄美大島に移り住み、奄美の動植物や風景をモチーフにした絵画を描き、昭和52年(69歳)、誰にも看取られず奄美市名瀬の借家で生涯を閉じたことは読者諸氏におかれてもご存じの向きも多いことと思う。この生涯を振り返るとき、才能に恵まれながら中央画壇から離れ、縁者もない奄美に単身で移住し、赤貧洗うかの如き生活を送り、誰からも評価されることなくこの世を去ったという一種ドラマティックな物語性があることに誰しも気付くはずである。これらは既に先達の手による豊富な文献等で公にされ、その生き様に触れた人々の熱い共感とあいまって、孤高、清貧、不遇などという形容を冠せられながら、「人間・田中一村」の姿は作り上げられてきた。同時にその伝記が先行し、結果、「画家・田中一村」の姿及び作品に関する調査・研究等は追従を余儀なくされてきたところもある。

本展の開催に先立ち、それまでの先行研究を礎に複数の公立美術館学芸員による調査が行われた。その結果、より正確な情報や新しく確認された事実等が多数浮かび上がってきた。今回、その成果を、田中とその画業に対する客観的な事実として改めて紹介することができる機会を得たことは、とりもなおさず、「画家・田中一村」の新たな全貌の端緒を開くことに他ならないものと考えている。

先にも触れたように、田中の生涯については多数の出版物等により衆知されているとおりが、その足跡だけでもまだ多くの不明な点が存在している。

その最大の謎の一つに田中の奄美移住の目的があると考えている。田中の生涯は、まぎれもなく職業画家のそれである。結果、無名で終わろうとも絵を描くことを生業とし、

絵を描くことで自分のアイデンティティを認識した一人の日本画家であることに相違ない。その田中が「画家」として奄美に移住したことにどのような目的があったのか。行き先は奄美でなければならなかったのか、逆に奄美でなくてもよかったのか。田中の奄美移住について考察を深めることは、田中の絵に対する考え方、志向の在り方を明らかにすることにつながる重要なファクターであり、欠くことのできないステップであるような気がする。

ここで、田中の奄美移住までの画業を簡単に辿ってみる。児童画の展覧会で受賞(展覧会名及び賞は不明)したのを機に父親から「米邨」と画号をつけられたのが大正4年(7歳)のときで、これが田中の年譜で最初に出てくる絵に関する記録である。この頃から栃木県佐野市の料亭で画会を幾度も開催し、短冊や色紙など今に残る作品を制作する。大正10年(13歳)、私立芝中学校入学の年に南画を始め、大正14年(17歳)、「全国美術家名鑑」に氏名が記載される。翌大正15年(18歳)で東京美術学校日本画科に入学、2ヶ月で退学(3ヶ月は誤り、理由は不明)する。同年、父親が音頭をとり政財界の有力者を招いて「田中米邨畫伯賛奨會」が11月から(12月開催は誤り、12月まで開催)東京京橋の国民新聞社講堂で開催される。

昭和6年(23歳)に南画との訣別を意図する作品を描き、それ以後昭和20年代初頭まで年紀(作品に記された制作年月日等)がない作品を制作しており、この期間の制作の実態については不明な点が多い。この間、昭和10年(27歳)に父親を亡くし、昭和13年(30歳)には東京四谷から千葉市千葉寺に自宅を購入して移住、自宅周辺の情景や観音像等をモチーフにした作品を制作する。

昭和22年(39歳)、田中は画壇にデビューする。千葉県内の公募展(千葉県美展という説もあるが同展は昭和24から開催)で入選を果たす。同年9月に画号を柳一村に改名し、直後、川端龍子主宰の第19回青龍展に入選する。この入選作品は事前に時田直善(1907～2000年、青龍展作家)に^{こしたえ}小下絵の指導を受けたものであるが、審査後田中は入選の報告はおろか以後一度も時田に面会していない。さらに翌昭和23年(40歳)、第20回青龍展にも入選を果たすが、本命の作品が選外だったことに満足せず入選を辞退し、さらには審査結果等について川端を批判する。

昭和24年(41歳)からの4年間については公募展等への応募の形跡は残っていない。昭和27年(44歳)に、東京美術学校の同期生だった日展作家の加藤栄三が田中に対し日展への応募を勧めたという伝聞が残っており、それを受けてかどうか分からないが、翌昭和28年(45歳)に続き昭和29年(46歳)と2年連続で日展(日本美術展覧会、当時)に応募し、いずれも落選する。一度目の審査員には東京美術学校同期生の東山魁夷、二度目の審査員には同じく加藤がいたが、その後とうとう日展には挑戦することはなかった。さらには昭和32年(49歳)に秋の院展(再興日本美術院展)、翌33年(50歳)にも同展に応募し、結果は連続の落選である。

日展及び院展への応募の間隙をぬい、昭和30年(47歳)、制作を依頼された天井画の納入を兼ねて能登半島を旅行する。同年、九州、四国、紀伊半島の順で取材旅行(この旅行でトカラ列島には行っていない)をし、終えてから南への憧憬を姉に語ったという伝聞が残されている。昭和33年秋、2回目の秋の院展落選直後、千葉の住宅を売却した資金等をもとにいよいよ奄美への旅立ちを実行に移す。出発に先立ち近親者に伝えた目算は、「奄美、屋久島、種子島を巡り北海道へ渡り、その後東京で個展を開き絵の決着をつけたい」(田中の語ったとされることば)という10年越しの旅行計画であったといわれている。そして12月13日早朝、船で名瀬に到着する。もし語った計画通りの行程であったとすれば、これは長大な旅行の最初の目的地への第一歩だったことになるが、結果的に奄美移住の初日となったのである。

以上を、田中が居住した地域による時代区分と画業とを対照して捉えなおすと、東京時代(東京に居住した期間)のほぼ前半(大正2年～昭和元年頃)は、能力及び作品が周囲から高く評価された時期であり、同じく後半(昭和元年頃～昭和13年)及び千葉時代前半(昭和13年～昭和22年頃)は、意識の上で南画を卒業し試行錯誤を経ながら自分の作品の在り方を模索し続けた時期であり、千葉時代後半(昭和22年頃～昭和33年)は、さらに模索を続けながら自分の作品を積極的に世に問いかけた時期として整理することができる。

しかし作品の内容に視点を据えと、さらにこれにとどまらないことが分かってくる。ポイントは二度目の院展応

募作品である。日展及び院展応募の作品は、いずれも本人の手により後に処分されて今では実物を見ることはできないが、この二度目の院展応募作品は幸いにして写真(図版1)が残されている。画面全体を覆うように描かれたモチーフの植物群。それら植物群の輪郭線は田中独特の造形的な感性を反映して優美で鋭く、写実の域を逸脱しない範囲で単純化されている。さらに、それらは近景と中景に大胆に配置され、遠景はごく僅かな面積を画面上に占めるだけである。しかも構成上の画面分割は、明らかに西洋美術の構図法の一つである矩形法を用いているのを確認することができる。このモチーフの捉え方や画面構成には、明らかにそれまでの千葉寺近辺の長閑な情景を描いた作品とは一線を画すものがあり、作品の質こそ大きく異なるものの、むしろ奄美時代の画面構成(図版2)に見られる特徴との間に大きな共通点、あるいは連続性が存在していることが分かる。モチーフに使用された植物こそ異なるが、それらを用いた造形的な工夫は殆ど同じ傾向にあると見て差し支えなからう。つまり、奄美での作品シリーズのスタートは既に千葉時代の終末期に切られていたということである。



図版1



図版2 <<不喰芋と蘇鐵>> ©2010 Hiroshi Niiyama

奄美移住の謎を考察する上で重要な点はどこにある。こう考えると、奄美への旅立ちは、千葉時代に掴みかけた、もしくは掴んでいた画風を発展させるための旅立ちだったのではないかという推論が成り立つことになる。と同時に、その布石になったのが九州、四国、紀伊半島への旅行であり、直接の引き金になったのが二度目の院展落選だったのではないかという構図も描けるのである。そこに田中が最初に奄美に向かったという事実を加味すると、自分の画風を確立させるための何かが奄美にあるということを、かなり具体的にイメージしていたことも否定できなくなる。すなわち、田中は画業上の明確な目的意識を抱いて奄美に来たという仮説が成り立つのである。

ただし、奄美移住について考察する場合、中央画壇とのかかわり(田中の場合、全国レベルの公募展への挑戦)を断つまでの経緯について、改めて冷静に捉えておく必要がある。よしんばどのような目的や事情で奄美に来たにせよ、奄美移住のプレステージとしての時期のことであり、この時期の出来事が後の奄美移住に深い因果関係があるとみて然るべきだと考えるからである。ここで、田中の中央画壇への挑戦の経緯をもう一度振り返ってみる。田中の全国レベルの公募展への挑戦は団体展への応募という形で行われ、順追って、青龍展に連続2回、日展に連続2回、院展に連続2回の計6回が全てである。いずれも一つの団体展に連続2回応募し、青龍展での入選1回を除き、他は入選辞退1回、落選4回という結果を残し、これら公募展の一切に背を向けたことになる。

この一連の事実をどのように解釈するか。その解釈の仕方により、田中の画家としての人物像が大きく姿を変えてくる。例えば、中央画壇から意図的に排斥されたがために不遇な画業生活を余儀なくされたとする立場での解釈と、公平公正な展覧会審査の結果を承服することなく公募展という戦場の第一線から逃避したという立場での解釈は、根本的に異なってくる。心の趣くまま田中の作品を楽しみ、味わう場合の解釈は自由であるが、客観的な考察を期すなら、いずれの解釈もあり得るという前提で事実を冷静に直視していく必要がある。田中の才能や資質、研鑽・努力の実態などはさておき、田中の人物像を見極める作業は、奄美移住の謎を解く作業に直結するところがあるのである。併せて、幼少期から青年前期にかけての恵まれすぎたともいえる田中を取り巻く美術に関する環境、生涯に渡る支援

者の存在、自ら望んで奄美に来たという事実、その他を含めて検討材料としていく必要がある。

いずれにせよ、行き先が奄美でなければならなかった目的、ないし理由があるとすれば、田中は決して、現状打開のきっかけを放浪の旅で見いだそうという漠然とした目的で奄美に来たことにはならず、ましてや異境の地における画業への憧れなどという消極的かつセンチメンタルな理由から長い旅に出たことにはならないことになる。そこには、田中の「絵の決着」をつけるための命運を賭けた起死回生の大逆転劇への緻密で大胆な計画の気配さえ漂ってくる。それを成すために、自分の作品に最も適合した場所を奄美として見据え、必要であつたればこそ自ら退路を断ち、人生最大の勝負に出たということも考えられるのである。

田中の作品及び画業を語る上で、奄美での作品は不可欠な存在であり、奄美での作品なくしては没後の評価もあり得ない。やはり、「画家・田中一村」の全貌をひもとくための全てのベクトルは、画家として、田中がなぜ奄美の地を選んだかという部分に向いてくるのである。

読者諸氏におかれても、ぜひここ奄美の地で、東京、千葉、奄美の各時代の作品を比較しながら本展を御高覧いただき、改めて田中作品の魅力と「画家・田中一村」の奄美移住について思いを馳せていただければ幸甚と、切に願ってやみません。

(田中一村記念美術館学芸専門員 濱元良太)

特別展「田中一村 新たなる全貌」

期 間 平成22年11月14日(日)～12月14日(火)

11月17日(水)、12月1日(水)は閉館

主 催 鹿児島県奄美パーク 田中一村記念美術館

協 賛 町田酒造株式会社

観覧料 一般1,000円(800円) 高・大生700円(560円)

小・中生500円(400円) 幼児無料

()は20人以上の団体料金

「奄美の郷」の観覧料は含まれません。